

シンポジウム報告①

「震災後の生活と民俗調査の効用」

俵 木 悟 (成城大学)

はじめに：私と東日本大震災

ただ今ご紹介いただきました、成城大学文芸学部で民俗学を教えております俵木と申します。民俗学と申しましても私の基本的な関心は民俗芸能なので、こうして舞踊学会にお招きいただいたのかと思います。今日の話には芸能のことはほとんど出てきません。今回の報告は「震災後の生活と民俗調査の効用」というタイトルにしておりますが、災害後の生活にはあまり触れることはございません。岩手県大船渡市の碁石地区というところで民俗調査をしたことが地域の人たちにどう影響し、どのような効果をもったのかということを考えてみたいと思っています。

私は、震災の前に東北で調査したという経験がほとんどないですね。震災の前年の2010年から宮城県と仙台市それぞれで民俗芸能の調査事業に調査員として関わることになってはいたのですが、両事業とも震災に伴って一時凍結されてしまいました。また2011年3月の震災当時、私は東京文化財研究所無形文化遺産部、これは舞踊学会の方々には旧芸能部といったほうが通りがよいかと思うんですけど、その研究員をしておりました。ここは後に東北地方太平洋沖地震文化財等救援委員会、いわゆる「文化財レスキュー」と呼ばれている国の活動ですけれども、その事務局が置かれ中心的機能を担うことになったところですが、私はちょうど2011年3月でそこで勤務を終えて4月から大学に移ることがそれ以前から決まっておりました。そういうわけで、実質的にこの活動に関わることもありませんでした。ですから、自分自身のそれまでの研究活動の中で東北との縁はほとんどありませんでした。仮にももしそのまま東文研に勤めていたとしたら、業務として深く震災後のいろいろな活動に関わることもあったと思うのですが、結果的にそれもなかったということで、私はどのように震災に関われば良いのか分からなかったのです。震災があったから急に現地に押しかけるといっても、それはそれで大変失礼なことではないかという思いもありましたし、私の身近には、震災のあといち早く積極的な活動をしていた人たちがおりました。このあと登壇される橋本さんは、私の大学院時代の先生なんですけど、すでに動き回っていましたし、もちろん懸田先生もそうですし、東北文化財映像研究所の阿部武司さんとか、

宮城県教育委員会の小谷竜介さんとか、全日本郷土芸能協会の小岩秀太郎さんとか、あるいは現東文研の久保田裕道さんとか、そういう友人たちが積極的に動く姿を見ながら、私はいったい何をすればいいのだろう、何かしないといけないのかなと思いつつも、何ができるのか分からないという状態でした。橋本先生には、このタイミングで東文研を辞めるなんて、役に立たないやつだと叱られた記憶がございます。ちょうど一番働かなければならない時期に職を離れてしまったんですね。

そうして大変迷っていたのですが、2011年6月18日に、阿部武司さんに連れ出されて初めて被災地に行きました。電話で話していて、「どんなに悩んでいても、現場を一回も見ていないんじゃないかと言ってもしようがないでしょ」と言われまして、初めて気仙沼、陸前高田あたりを回ったんですね。まったく偶然なのですが、ちょうどその日は震災から百日目に近い日曜日にして、大船渡市三陸町の越喜来(おきらい)で、浦浜の金津流獅子躍(ししおどり)が百ヶ日法要で踊っているところに行き合ったのです。これは、YouTubeにあがっている阿部さんが撮った映像です。越喜来の浦浜というところは、念仏剣舞という芸能も伝えているところにして、本来だったら死者供養でその念仏剣舞をやりたいところなんでしょうけれど、道具がすべて流されてしまったということでした。獅子躍りもこのときが活動再開の最初だったんですね。ご覧になって分かるように、観客は全くいないんです。見ているのは私と阿部さんだけだったと思います。そういうところに立ち合ったというのはすごく大きな経験でした。

また同じときに大船渡の門中組という虎舞の伝承館を訪ねて、そこの方々にお話を聞きました。門中組は、門之浜と中井という、後に民俗調査をすることになる碁石地区のすぐ隣の地区で、同じ神社の氏子圏で歩いて5分10分のところにあります。

これらの経験で何が大きかったかという、被災した人たちがこれから再開に向けて何をしたいのか、どんな支援が必要なのかを非常に熱心に語っていたことです。それを見て、自分にもできる役割が何かしらあるのではないかと感じました。私の側から勝手に地元は悲惨な状況だと決めつけて心配するのではなく、地元の方々がかようなこ

とがしたいとか、してほしいということを積極的に言っているのだから、それに答えることでも、十分に役割を果たせるのではないかと考えるようになりました。

その後、例えば調査事業であれば宮城県の調査事業に加わったり、先ほど民俗芸能学会福島調査団のお話が出ていましたけれど、懸田先生が団長として100の尽力をされたとしたら、私がやったのは0.1くらいなんですけど、それにも関わりました。また岩手県では宮古市の調査記録事業に今でも関わっていたり、また支援事業として、これは元東京大学の船曳建夫先生に頼まれて、企業メセナ協議会の「百祭復興」のお手伝いをしたりしました。これらはある意味公的なプロジェクトに関わったものなんですけど、今日お話しする『ごいし民俗誌』というのはこれらとは違っていて、これは完全に私的なプロジェクトとして始めたものです。予算の裏付けもなかったですし、何の組織もない自分たちで始めたプロジェクトであります。ただ結局、このプロジェクトが私の中では一番深く震災と関わるものになったのです。

『ごいし民俗誌』ができるまで

『ごいし民俗誌』というのはこういう形で本になって出ております。全文ダウンロードできるようになっていますので、『ごいし民俗誌』と検索して見てみてください。

東京文化財研究所に私の後任で入りました今石みぎわさんという民俗学者の方が、2012年の6月に「無形民俗文化財の復興支援ネット」準備会というものを立ち上げておりました。その今石さんが、震災で移転した地域の人々のかつての暮らしを可能な限りまるごと記録するプロジェクトとい

うアイデアを出されて、私のところにも相談に来ました。その翌月に、今石さんが災害・復興アーカイブシンポジウムin宮城というところに出かけて行ったときに、参加していた何人かの方々と話をしたそうです。そこに参加者として来ておられた大船渡市末崎町西館というところのMさんに会って話をしたところ、自分の地元の碁石地区でそれをやってくれないか、と提案を受けたそうです。そうして7月21日に今石さんと私で、確か今石さんの軽自動車に2人で乗って、仮設住宅の談話室に泊めてもらって、碁石地区の「復興まちづくり協議会」に参加してきました。復興協議会をまとめていた防災科学技術研究所の佐藤隆雄先生に協力をお願いしたり、地元の協議会の会長Tさんと我々を招いてくれたMさんと具体的に何をしましょうかということ話し合ったりしたのが最初です。

この大船渡市の末崎町の5つの部落の集まりを碁石地区と呼んでいるんですね。泊里、西館、碁石、山根、三十刈という5つの部落がごぞいます。特に泊里湾という港がありまして、その周辺の泊里という部落が津波で壊滅的な被害を受けています。この写真をご覧になっていただくと、2010年では建物が並んでるのに対して、2011年はほとんど何もなくなっているのが分かるかと思います。住宅としては2棟しか残りませんでした。その後大船渡市が指定した災害危険区域を示しますと、赤で示されているのが第1種区域、ここには住居あるいは公共施設等は建築してはならないということになっております。オレンジ色で示したところは条件付きで住居が建てられるところなんですけど、その条件はかなり厳しいもので、実質的にここはもう人が住むことはできないところになっています。我々が行った時点ですでにほぼ決まっていたのですが、最終的には平成24年か25年に泊里という部落は解散を決めました。この調査をしようということになりました。

調査の基本的な方針は、震災以前のその土地でごく当たり前だった生活を記録するというものでした。地元の人たちにも、価値がある大事なものだから記録をするのだという頭があったようで、普通の生活を記録するということは、なかなか一般の方々に理解してもらうのは難しいわけですね。ですから、我々が実際にやっていく中で、こういうことを私たちはしたいので、ご協力をいただきたいと理解してもらう必要がありました。

そこで8月に「碁石民俗誌」のプロジェクトを企画立案いたしまして、具体的な手法として、一つは「聞き書き」、もう一つは「古い写真の収集」というのを掲げました。また内容としては、①「一年のなりわい」、それから②「暮らしの祈り」、いわゆる信仰に関わるもの、次に③「衣食住」、そ



『ごいし民俗誌』表紙

してもう一つは④「村の風景・景観」を盛り込もうということになりました。そして今石さんを通じて、漁村研究者として著名な森本孝さんが参加してくれるところになりました。森本さんは昭和50年代にこの一帯を歩いた経験をお持ちで、たいへん心強かったです。

2012年10月には、碓石地区の鎮守である熊野神社の祭礼がありました。熊野神社の氏子圏に当たる9つの部落が集まって、地元では「五年祭」と呼んでいます。数え年ですから普通の数え方で4年に1回のお祭りで、震災後初めての祭りが2012年に開催されました。この祭礼のときから実質的な調査を開始しました。このときの副産物として、私たちが撮ったこの祭りの写真に、地元の人たちが提供してくれた古い写真や子どもたちの感想文などを加えて編集した『西館の祭りは世代を超えて』という、震災後初めての祭りの記念誌を作りました。その間も我々はずっと調査を続けて、2014年3月に『ごいし民俗誌』を刊行しました。

『ごいし民俗誌』調査の経験から①：屋号の調査

『ごいし民俗誌』を作った経験を振り返ると、そもそも初めから綿密な計画があったわけではなく、私たちに何ができるのだろうということを、調査をしながら考えていくということがありました。これは特段にどこかの大学とか機関とかのプロジェクトとして始めたものではなく、知人たちと個人的に始めたことでしたので、いつまでに何をしなければならないということはそれほど考えていませんでした。しかし、やる以上は何かの形に残さないといけない、しかもそれは研究成果というより、地元の人たちに受け入れられるものにしたいという意図はありました。そして調査をしながら、我々が研究者だからできることと、地元の人たちがどういうものを求めているのかとか、どういうことなら喜んでもらえるかということ、どうやって繋げられるかということ意識してやってきたわけですね。その接点が最終的

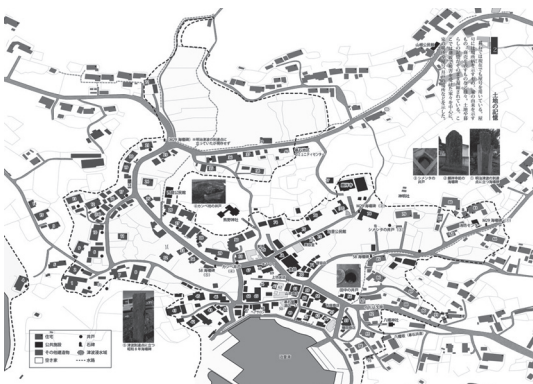
にこのような形になったということだと思います。

例えば、私たちは震災があったから調査に行ったというのは紛れもない事実で、当初の構想は津波の被災範囲の調査だったわけですけど、実際に調査していくと、当たり前ですけれど、地域の生活は生業にせよお祭りにせよ、あるいは人の移動などにせよ、もうちょっと大きな範囲で考えなければほとんど理解できないものであると改めて気づきました。あるいは、衣食住をテーマのひとつにあげていたんですけど、その衣食住の中で住に対する関心が地元の中では非常に高く感じられました。これは移転の問題でみなさん新しい住宅を作らなければならなかったり、あるいは被災した家屋の再建をしなければならなかったりして、家の作りに非常に高い関心があったということかもしれません。それで、衣食住の中では住居に特化して調査をすることになって、民俗建築が専門の鈴木清さんに参加してもらうことになりました。

さらに、こういった震災の後というのは、もちろん地域に残っている貴重な資料が流出するということがあるんですが、それと同時に個人の家で所有していた資料がこういう機会に集められたり、出てきたりするということもあるんですね、今回の我々の調査でも、結果として非常に興味深い資料が発掘されたりして、そういったものをどう活かすかというのを考えることにもなりました。

ということで、実際にこの調査がどのような効果を持ったのかということをお話したいと思いますが、これは何人もの共同の調査でやっていますので、ここで話すのは基本的に私個人の考えです。みなが同じように思っていたかどうかは分かりません。ただ、私自身が担当した部分や、その経験からは、こういうことが言えるのではないかとこのお話をします。

まず例えばですね、これは舞踊学会の方々と言ってもなかなか分かりにくいと思いますが、私たち民俗学者が地域に入って何か調査しようとする、最初にやることのひとつに家の一軒一軒を調べて歩くということがあります。ただし今回の調査は、大半の家がなくなってしまっていますので、その家の方を直接訪ねることができないのです。それで何をしたらかというと、屋号を調べていくことなんですね。屋号調べというのは民俗学では特段珍しいことではなくて、どこでもやろうと思えばやれることなんです。これが意外に面白い効果があったんです。屋号というのは地元の人にとっては、普段は特段その意味を考へることがなかった。ただ似たような苗字がいっぱいあるから、例えば田中さんとか加藤さんといっても周りに田中さんだらけで困るので、家の名前前で呼ぶ。つまり、家一軒一軒に名前がついていて、その地域の皆さんにとっては家と家を識別する記号みた



津波浸水域の屋号の図

いなもので、生活に必要な知識ではあっても、特段に意味を考えたこともないし、またその地域全体の屋号を知っている必要もないんですね。付き合いの範囲で必要があれば使う言葉であるということです。ところがこれを調べてみると意外と面白い。なぜそんな屋号がついているのか改めて発見していくことになります。さらによく屋号を知ると、実は家がかなり頻繁に移動をしていることが分かったりします。地域のコミュニティというのは何百年と続いていると思われがちですが、とくに漁村というのは構成員がけっこう頻繁に入れ替わったり、商売人が来て定着したり、移動したりしているんですね。それでその出入りが屋号を調べることによって分かったりします。

さらに、「コンプリートする楽しみ」と書きましたが、広範囲の家を全部調べましょうというのは結構面白いもので、コレクションの楽しみといえますか、一軒一軒調べつくしてあともう一つとか、あとここだけ分かんないという、だったら絶対全部調べてやるという楽しさですね。我々はもちろん地元の人から話を聞くんですけど、地元の人たちだって全てを知っている人はいないわけで、知らないところがあると、知っている人いなくて探し回ってくれるわけです。実際に「民俗誌」の中にはこのように載っているんですけど、点線で囲われた範囲が津波の浸水域で、若干色が黒くなっているところが、津波で流されてしまって、我々が調査に入った時にすでに建物がなかった家であります。それらすべてに番号をふっていったって、一軒一軒屋号はなんだったのかというのを調べていくわけです。それをこのように表にしていっていったわけです。結局コンプリートできなくて3軒ぐらい不明な屋号があったんですけど、こんな感じになりました。

これを見ているとさっきも言いましたが、色々なことが分かってきます。例えば、「木戸脇」という家がある。「木戸脇」というくらいだから木戸の脇にある家で、一体どこの木戸の脇なのか。実際にその近くに木戸があるのかというとなんてですかね。それで話を聞いてみると、実はこの「木戸脇」というのは昭和8年の津波の時にこっちの高台に上がってきて、もともとは泊里浜にあったという話が出てきます。ではなぜ泊里浜にあったとき「木戸脇」と言われていたか、それはかつて西館城というお城があって、その城に入る門の脇にあった家だという伝承が聞きました。

あるいは「お金塚」というおもしろい屋号がついている家があって、普段からみなさん「お金塚」と呼んでいるんですけど、改めて「お金塚」と言われると「なんなんだそれ、お前の家に埋蔵金でも埋まってるんじゃないのか」とか冗談で言っているんですね。こういうところで我々調査する側

の知識が生きてくるわけで、同じような屋号が他の地域にもあるのではないかと調べてみると、やっぱりあるんです。そうすると、その例は庚申塚の近くにある家で、「庚申」って「庚（かのえ）申（さる）」ですから、つまり「かのえづか」が訛って「お金塚」になっている。それで私たちが調べたその家も、その奥にはやはり庚申塚があって、その入り口に建っていたということが分かってきたりする。こうやって地元の人が不思議だと思うことと我々が調べて分かることがマッチングされてくるわけです。実際にこの家は今回の津波で別のところに移動してしまって、今は庚申塚の近くにないんです。そうするとこういうのはだんだん忘れられていってしまうんですけど、こうやって調べることでそのいわれが残っていったりする。

『ごいし民俗誌』調査の経験から②：資料の発見と読み解き

あるいは先ほどもちょっと申しましたけど、新しい資料が発見されたりする。この資料を読み解くというのは、地元の人を持っている土地固有の知識と、私たちが例えば資料なんかを駆使して得られる知識がうまくマッチングしていく良い例だと思うんですね。例えば、偶然なんですけど、我々が調査をしている期間に、古いこの地域の絵図、おそらく江戸時代のものだと思われる絵図が発見されまして、「河北新報」という地元の新聞にも、藩政時代の熊野神社と泊里浜を描くと紹介されました。実際この泊里浜というのは津波でなくなってしまった部落ですので、ニュースバリューがあるわけですね。

これが調査中に出てきたので、当然これには何が描かれているのかと興味が出てくるんですね。具体的に例をあげてお話しすると、この絵図には今もある熊野神社が中心に描かれていて、その前に鳥居が描かれていて、そこから道が一本赤い線でなぞられているんですね。そうするとなぜここ



熊野神社古絵図

赤で線が引かれているのだらうと。浜のほうには別の小さな鳥居が描かれているから、これはおそらくこの神社の参道ということになるでしょう。そうすると誰かが教えてくれるんです。実はこの道は、昭和30年代まで熊野神社のお神輿が通っていた道だと。昭和30年代に浜の護岸工事をして東のほうに広い船曳場を作ったので、それ以降は神輿の御旅所はそっちに移ってしまったんですけど、その前はちょうどこのあたりの位置に出ていたんだよ」と教えられるわけです。こんな風にお祭りの神輿が通るルートの変遷が分かったりする。

あるいは、もうちょっとクローズアップしてみると、地元でも有名な「三面椿」と呼ばれている、この地域の名物の椿の木があります。その手前に石ころのようなものが3つ書かれていて、ちょっと見づらいんですけど、拡大すると「三社コシカケ石」と書かれています。「三社コシカケ石」ってなんだろうとなって調べると、ちょうどこの道の脇に魚屋さんがあって、そこのご主人が、言われてみると昔、昔と言ってもそんなに昔ではないんですけど、そこに石があって、その石は神様の石だから乗っかると怒られた、などと思い出を語ってくれるわけです。ただその石が平成4年に神社の参道をコンクリートで舗装した時にどけられてしまったと、だから今はその石はないんだよ、というわけです。そうすると別の人が「いや、その石は確かそこらへんに動かしたはずだろう」と言い出すんですね。どういう石だか分からなくて探して、結局その神社の宮司さんの家のおばあちゃんが覚えていてくれて、ちょうど道の脇にどけて置いてある、普通に見たら全く大事な石だとは思わなかったの大きい石ころなんですけど、「これがその参道にあった石だよ」と教えてくれたんですね。その石はこの神社の創建に関わって、海から上がってきた三社権現が、そこに腰かけて休んだという伝承のある石だったのですが、そんな



現在のコシカケ石

ふうには、そこに転がっているのがただの石ではない、意味のある石だということも、こうやって絵図を読み解く過程で再発見されたわけです。

同じように、こうやって地図をクローズアップしてみると、この海の中に「蛭児嶋」という島があります。「蛭児嶋」ってなんでしょと、今はそんな島の名前は聞かないですけど、昔はそういう島があったと教えてくれる人がいます。さらに探すと、こういう島だったという写真を提供してくれる人が現れました。これは戦中に撮った慰問写真です。ではこの島はどうなったのか、左は1948年、右が1977年の航空写真ですけど、湾の西側はかなり大きな堤防を作ったことで取り払ってしまったんですね。それがこういう資料が出てきたことで、それをきっかけに、昔は潮が引くと陸続きになってこの島に渡ることができたんだよというような思い出が語られるようになる。こうして絵図に描かれたものを読み解くことが、景観の移り変わりを知ったり、それにまつわる人の記憶を引き出すことにつながったりするわけです。

『ごいし民俗誌』調査の経験から③：固有名詞にこだわる

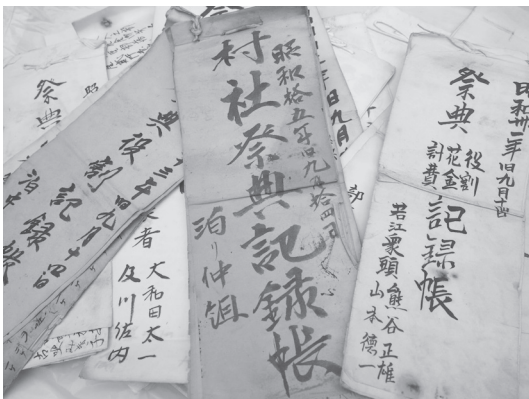
それからもう一つ調査の中で感じたのは、固有名詞にこだわることの重要性です。私たちはこういう資料が出てきたときに、歴史を再構成するか、ある時代の社会のあり方を考えると、研究者としては他の様々な資料や情報と組み合わせ、一般的な理解につなげようとするわけですけど、その資料が地元の人にとって持つ価値はそういうこととは違うのではないかと。我々はそれで何かしらの学術的な成果を得られるかもしれないけど、この調査では、私たちにできることをできるだけ地域の人たちが求めるものに近づけたいと考えてきたわけですね。そうしたときに、むしろそういうものに描かれている個々のものとか人とか場所の名前ですね、こういったものが非常に重要でして、その固有名詞があって、それが彼らの記憶を引き出していくということに驚かされました。ですからこの調査では、資料に意味づけをするよりも、固有名詞を同定するというに強くこだわりました。

例えば、最初に聞いた情報をもとに作った地図を持って歩き回っていたらですね、そこに書かれている岬の名前とか島の名前とかが聞く人によって違っていることがあったり、この島にはこういういわれがある、別の島はこうだというのが山ほど聞けるわけです。実際に漁船に乗せてもらって、海から見せてもらったこともありました。海の側から見るのと陸の側から見るのとでは全く岸辺の光景が違うんです。岩などは船に乗っているときに自分の位置を確かめるために非常に重要です。

公的な地図なんかには全く載っていませんが、目立つものにはほとんど名前がついていて、その名前にもいわれがある。こうやって地域の記憶が土地の名前に刻まれているということを実感しました。

あるいは、私にとっては非常に大きな体験でしたが、なくなってしまった泊里部落の祭礼の記録が出てきました。部落が解散するというので、最後の部落会長さんの家に部落の雑多な文書一式が段ボールに入って集められていて、その中からこういうものが出てきたんですね。これがなかなかすごくて、昭和15年から平成8年までのすべてのお祭りの記録、参加した人の名前と役割、それから何にいくらかかったかの費用の細目です。波がかぶってしまっていくつか判読が難しいものもあったんですが、とにかく人の名前がたくさん書かれているわけです。私の見方だと、ここからこのお祭りはどのように移り変わってきたかを考える一つの資料としてとらえてしまうところですが、地元の人たちは違うんですね。これを一緒に見ていたとき、彼らが話題にしていたのは、そこに書かれている名前の一人一人について、この人は誰でどんな人なのかということでした。ですから私は自分の解釈を加えることはやめて、ここに書かれている人の名前を全部あげて、それが誰なのかを特定することにすべて時間を使いました。実際にはこれがすごく難しい作業でして、当然昔の人だから今の人に聞いても分からない人もいますし、人が書いた文書ですので人名の表記にもかなりぶれがあり、同じ人なのかどうか判断がつきにくいこともありました。これらを片っ端から確認してエクセルに入力していった、最終的にはこんな形になりました。

大事なのは最終的に分かったことよりもそれを確認する作業そのものです。すでに部落に残っている人が少なくなっていましたし、その人たちに聞いても必ずしもみなのことを知っているわけで



泊里組祭礼記録

はないんです。それで彼らがどうしたかという、方々に電話をかけていくんです。「この苗字のこんな人がこの時代の記録に載っているんだけど、あんたの親戚かい？」などと電話して聞いていくわけです。実は前にも言いましたように、泊里という部落はすでに解散を決めていて、多くの方が避難して外に出て行っている。日常的なつきあいがほとんどなくなっていたときに、人名を確認するために電話をかけまくったんですね。これが彼らにとっては非常に重要だったと思うんです。「これって誰々さんかね？」という話をした後「ところで最近どうしてるの？」という話が始まって、中には避難した後に、このために初めて電話したという人たちもあつたりするくらいです。つまり何が分かったかというよりも、それを地元の人たちと一緒に突き止めていくプロセスというのが非常に大事だということをここでは言いたかったんです。

その後の『ごいし民俗誌』

最後に、その後の『ごいし民俗誌』というお話をします。手前味噌ではありますが、『ごいし民俗誌』はなかなか良い評判をいただいたと思っています。今でも現地に行くと、あの本を作った人だと認識してくれている人がいます。

2014年に完成した後、その年の7月に、地元で『ごいし民俗誌』勉強会というのを開催してもらいました。その頃には意外な反応がありました。この本にこんなことが書いてあるけれど「もっとたくさん似たようなことがあるよ」とか「うちのほうにも同じようなことがあるよ」という話がたくさん出てきて、中にはなぜこっちの話が載っていないんだといって怒られることもありました。私にとっては意外でしたが、ある意味嬉しい反応でもありました。というのも、元々「被災地の記録」という想定で作ったものですので、『ごいし民俗誌』という名前ですけれど、実際には基石地区全体には調査が及んでいないわけです。その中の被害の大きかったところが中心で、そこから関連する周辺地域を調べていったというのが実情です。ところが地域の人たちの中には、これを震災の記録とか、震災で失われたものの記録として読んだわけではなく、言ってみれば地域の生活文化を掘り起した記録として読んでくれた人がいたわけです。最初に言いましたけど、家の呼び方とか、お祭りのときに誰が出ていたかなんていう、ごくローカルで平凡なことの記録なんて、一見するとなんの価値があるのかと思うようなものですが、それをこれだけ掘り起こすと、逆に「そんなことだったらもっとたくさんあるよ」とか「俺だってもっといろんなこと知っているよ」というのが出てくるわけです。そうやってここで学んだのは、

いわゆる震災後の研究者の活動とは何か、ということ。「文化財レスキュー」みたいに何かを救出する、救助するという活動が主体であることは間違いないんですけど、それとは違って、自分たちが当たり前で過ぎてきた生活の意味を再発見するというような効果がこれにはあったのではないかなと思います。そして私が嬉しかったのは、そういう話がいっぱい出て、7月に地元に行った時に、地域の人たちが中心になって『ごいし民俗誌』を叩き台にして、増補改定していきたいと言ってくれたことでした。これは本当に嬉しかったです。

その後、2014年11月の復興まちづくり協議会で、復興事業の一環としてこれをバージョンアップさせていくことを提案してくれたそうです。各地区にそれぞれ担当者を決めて、テーマを決めて聞き取りをします。生活文化を記録するということが、こういうことなのだと思形になって理解できたので、それをぜひ続けていきたいと言っていました。私も今年の3月に現地に行って、では具体的に何から調査しましょうかというのを、なるべくやりやすいことから提案をして、例えば全部落の屋号を調べるとか、子どもの頃何をして遊んだかを調べるとか、あるいは地域に様々な人が集まる機会があるのですが、ヨウカギョウとかショウロウサマとか、なんとか講とかいろいろやっているんですけど、地元の人たちの多くはどれもただの飲み会だと思っているけど、それらにもそれなりの意味があるということ、せっかくだから調べたらどうですかと提案しました。そこからは地元の人たちが面白がって調査してくれればそれでいいと、成果が上がろうが上がるまいが、調べたことを面白がって思ってくれればそれでいいかと思っていました。ですからその時は、私たちは今までみたいに頻繁には来られないですけど、年に2・3回来て、みなさんが調べたことをどう整理できるかを一緒に考えましょうと言って戻ってきました。

これだけだと大変美しいというか、素晴らしい話になるんですけど、最後に付け加えておきますと、実際にはそれほどうまく進んでいないところがございまして、3月にそういう提案をして帰ってきて、しばらく私も忙しくて出かけることができなくて、先月、久しぶりに現地に行ってどんな感じでしょうかというお話を聞いてきました。そうしたら、実際はあまり進展していなかったんです。聞くところによると、やりたいとか面白そうとか手を挙げてくれる人はいるらしいのですが、ただ作業として具体的に何をすれば良いのかが分からないと言われました。そこでまた、最初とは違う意味ですが、私なりに地元との関わり方を考えていかなければいけないかと思うのです。以前は私たちが地元の人たちから話を聞いて調べ

る、それを地元の人たちに求められるような形で成果をまとめていくというようにやったわけですけど、今度は地元の人たちが何かを調べるのを私たちがお手伝いをして、一緒になって形あるものにしていくという、なるべく地元の人たちが主体的にできるような方法を考えていこうとするわけです。地元の人たちが楽しいと思って取り組んでいってもらえる方法を考えなければいけない。はじめから成果を求めなくてもいいと私は言ったんですけど、地元の人たちはそれはダメだと言うんです。やはり何かをやる以上、形のあるものにならないとモチベーションがあがらないと、いつまでに作るんだという目標がないと続かないと。それを聞いて、やることに意味があるというだけではダメだと、やったことが成果として目に見える方法を考えなければいけないと感じました。

一方で調査をするということが面白いということは、我々の調査に協力してもらった多くの人々が感じてくれたようです。実際にその後、古い写真とか資料を個人的に集めてくれる人も出てきました。だから私としては、そういう情報をたくさん集めていってひとまとまりのものにしたり、資料や情報どうしを関連づけたり、集めた資料を謎解きみたいにして読んでいったり、そういうことを重視しようということになりました。

最後ですけれど、現在は、例えば屋号調べだったら私たちが地図を作って、番号をつけた調査票みたいなものを作って、これを地元の人に提供して、どれだけ埋められるかやってみましょうというようなことを考えています。こういったことがどれだけ地元の人たちに役に立つか、私が評価することではないんですけど、少なくとも『ごいし民俗誌』の調査については地域の人たちが楽しんでやってくれたことが私にとっては一番でありました。これを今後は地域の人たちが主体となってやっていってくれればと願って、どう繋げていくかということこれから考えなければいけないところだということです。以上、ご静聴ありがとうございます。